

初期学校的社会化過程の 相互行為論的解明

—幼稚園年少級の初期場面に着目して—

Ethnomethodology at Early School Socialization :
Focusing on Interactions in Early Kindergarten

粕谷 圭佑*

KASUYA, Keisuke

〈本論文の構成（目次）〉

序章

- 第1節 問題の所在
- 第2節 本研究の学術的位置付け：社会化研究の相互行為論的転換
 - 第1項 社会化過程における学校教育の位置付け
 - 第2項 教育社会学における社会化論の展開と現在
 - 第3項 社会化論に対する本研究のスタンス：問いを共有し枠組みを外す
- 第3節 研究の基本方針：行為の基盤としての規範的秩序
 - 第1項 規則への服従モデルの問題点
 - 第2項 規則の利用モデルへの転換
 - 第3項 初期学校的社会化過程における相互行為の規範的秩序
- 第4節 本論文の構成

第1章 先行研究：教育のエスノメソドロジー研究

- 第1節 本章の目的
- 第2節 エスノメソドロジーの基本方針
- 第3節 エスノメソドロジー研究における「子ども」
 - 第1項 サックスの研究群における子どもの相互行為能力
 - 第2項 子どもの相互行為能力と社会化
 - 第3項 子どもの相互行為能力研究の展開
- 第4節 カテゴリーとしての「子ども」・「児童」・「園児」
 - 第1項 成員カテゴリー化装置
 - 第2項 「子ども」・「児童」・「園児」 カテゴリー
- 第5節 制度的場面としての学校内相互行為の研究
 - 第1項 教室における会話の系列的特徴

* 奈良教育大学学校教育講座

第2項 学校的秩序の構成

第6節 教育のエスノメソドロジー研究における本研究の位置づけ

補論 成員カテゴリー化のローカル性について

第1節 成員カテゴリー化の二つのモデル

第2節 ローカルな秩序としてのカテゴリー化

第2章 フィールドの概要と調査方法

第1節 本章の目的

第2節 調査概要

第1項 X幼稚園での調査概要

第2項 Y小学校での調査概要

第3節 調査対象フィールドのエスノグラフィ的記述

第1項 X幼稚園ほし組での生活

第2項 入園まもない園児の様子

第4節 ハイブリッドスタディーズとしての調査研究とその臨床的意義

第5節 データの提示方法

第3章 ルーティン的活動の構成 : 幼稚園年少級における「おあつまり」場面の分析

第1節 本章の目的

第2節 分析の焦点: 「おねむり」ルーティンと「エラー」の発生

第1項 「おねむり」ルーティンへの着目

第2項 発話位置に関するT1先生の違和感: 返事の「フライング」問題

第3項 分析の道具立てとしての「発話の順番交代システム」

第3節 現下の課題の変化: 「おねむり」ルーティン教示の展開

第1項 課題Ⅰ: 「おねむり」ルーティンの動作を順序通りおこなう

第2項 課題Ⅱ: 「はやく」する

第4節 「エラー」の合理性: 「フライング」の生起

第1項 課題Ⅲ: 「正しい位置」で返答する

第2項 課題Ⅳ: 「スタートダッシュ」で発話する

第5節 発話位置をめぐる課題化の取りやめ: 「できたことにする」実践

第6節 結論

第4章 集団的活動の教示 : 幼稚園年少級における「列になる」練習場面の分析

第1節 本章の目的

第2節 はじめて「列になる」場面での指示の特性

第3節 分析の視点: 教示と教示に導かれる行為

第4節 分析①: 「列になる」ことの教示の構成

第1項 園児の反応によってもたらされる教示の再構成

第2項 再構成された教示の利用

第3項 列の最小ユニットを用いた「小さい順」の構成

第5節 分析②：順番を「詰める」ことから見える列への志向性

第6節 結論

第5章 個人作業を導く一斉指導：幼稚園年少級における製作場面の分析

第1節 本章の目的

第2節 幼稚園における製作活動

第3節 製作活動を構成するための実践上の課題

第4節 データ概要：「製作」教示場面のコレクション

第5節 分析①：作業手順の特定化に埋め込まれた道具使用の特定化

第6節 分析②：公的な知識の構成

第7節 結論

第6章 児童的振る舞いの観察可能性：小学校6年生の「お説教」場面の分析

第1節 本章の目的

第2節 分析視点：サクスの社会化論

第1項 行為の観察可能性と社会化

第2項 成員カテゴリー化と社会化

第3項 分析方針

第3節 データの概要と「朝の会」での「非お説教場面」

第4節 分析：「お説教」の協働的組織の記述

第1項 教師の問いかけに対する優先的応答：「お説教」の開始

第2項 問題の定式化によるカテゴリー化：「お説教」の展開

第3項 笑いの共有による親密性の提示：「お説教」の収束

第5節 結論

終章 結論と展望

第1節 本研究の知見

第2節 知見の概括

第3節 本研究の意義と課題

引用文献

〈本論文の要旨〉

1 本論文の問題設定

本論文では、幼稚園年少級の保育者と園児の相互行為を分析対象として、子どもが学校組織に参入する過程を記述説明することが試みられる。

「学校に参入する」というイベントは、人生段階の節目として誰しもが経験するありふれたものであると同時に、ひとつの教育課題である。例えば、小学校参入時のトラブルを表した言葉として「小1プロブレム」が普及し、保育園・幼稚園と小学校の接続の円滑化を図る「保幼小連携」の必要性が声高になっている。すなわち、学校参入を課題として捉え、その解決を図ることが試みられているのである。

ここにはひとつの前提が横たわっている。「小1プロブレム」のように特定の子どもが学校での生活になじめないことが「問題」となるには、その馴染めない子どもが有徴性を帯びた存在とならなくてはならない。裏を返せば、そこには大半の子どもたちが、学校参入後のわずかな期間で学校に「なじむ」という前提がある。実際に、多くの子どもたちは、入学時から、あるいは入学まもない段階から、学校生活をスムーズに送り始める。

ところが、この一見あたりまえの事実は決して些細なものではない。学校空間は、さまざまな面において日常空間とは異なっている。一つの部屋に同年齢の子どもが集まるということ、一人の教師と数十人の子どもが対面しつづけるということ、授業という活動を行うことなど、様々な新しさが子どもたちを待ち受けている。こうした、日常とは異質な特徴を持つ学校空間にはじめて相対する子どもにとって、数ヶ月のあいだスムーズに生活を送れないことは、とりたてて驚くべきことではないようにも思える。しかし、実際には、子どもがすぐに学校になじめない場合、そのことは(おそらく誰の目にも)問題として映る。ここにむしろ、大半の子どもが非常にスムーズに学校になじむ、ということの方が驚くべき事実として浮かび上がってくるように思われる。

では一体、子どもたちが学校参入後のわずかな期間で学校に「なじむ」のはなぜなのか。子どもが学校に馴染んでいくこと、子どもが学校の一員となっていくこと、学校的な振る舞いを身につけていくことが短期間のうちに非常に巧みな形で成し遂げられているのなら、その過程は一体どのように形作られているのか。

以上が本論文の最も素朴な形の問いである。この問いに対して、本論文は上述の一連のプロセスを「初期学校的社会化過程」と名付け、エスノメソドロロジーを土台とする相互行為論的な立場から、子どもがはじめて学校的な場面に出会う幼稚園年少級での保育者と園児のやりとりを中心に分析している。この記述作業を通して、子どもが学校に参入する過程の相互行為の仕組みの一端を明らかにすること。これが本論文の目的である。

2 本論文の背景

本論文の学術的背景には、研究テーマとして社会化論があり、研究方法・研究態度としてエスノメソドロロジーがある。つまり、理論的に言えば、本論文は社会化研究をエスノメソドロロジー研究として展開する試みである。

ある組織に新参者がやってきて、その組織の正統な成員となるというプロセスは、社会が世代

を越えて存続していくための基本的な要件である。また、このプロセスにいかに対応するかは、その社会の新参者にとっても、また当の社会に先行して住まう人々にとっても、恒常的な課題である。さらにこの課題は、人間の世代交代という長いスパンだけに立ち現れるものではなく、われわれの日常のなかで局所的に立ち現れるものでもある。

こうした過程は社会学では伝統的に「社会化」と呼ばれてきた。社会化論のなかで社会化を担う組織は様々に設定される。そのなかでも、近代以降の学校教育は、子どもに既存の社会の規範や文化を内面化させる機能を持つ中心的な組織として論じられてきた。学校を通じた、その後の社会への社会化、つまり、学校教育の持つ「社会化機能」が主な研究対象となっていたのである。

しかし、学校は、毎年多数の子どもを学校の正統なメンバーにするという課題に日常的に取り組んでいる組織でもある。すなわち、学校を通じた社会化だけではなく、学校自体が一つの社会であり社会化先でもある。本論文の研究対象である「学校的社会化」過程は、この「学校への社会化」、より精確に言えば、学校的な思考様式や振る舞いを身に付けていく過程を指している。

ただし、この学校への社会化過程を研究するにあたり、本研究はこれまで行われてきた社会化研究の関心を引き受けつつも、「社会化」という枠組みを外したアプローチを選択している。すなわち、従来の社会化研究が採用してきた「規範の内面化」図式を採用せず、成員の志向に即した現象の記述を目指すエスノメソドロジーに依拠して、相互行為の参加者が規範を用いながら、子どもが「できるようになる」「なじむ」「まとまる」「覚えた」などといった変化の過程を組織していく過程を分析していく方針を採用している。こうした方針は、従来の「社会化」研究によって損なわれていた、教育場面の日常性を回復させる試みである。日常的な教育場面を観察すればすぐにわかるように、子どもたちを受け入れる教師（保育者）たちは、単に子どもたちと活動を行うだけでもなければ、ひたすらに規範を教え込もうと構えているわけでもない。そうではなく、学校的組織の実践のなかでは、教師（保育者）たちは、その時々の子どもの様子や、子どもの反応に即して、活動を局所的に組み立てている。そうした活動を通して、「いつの間にか」子どもたちは新しいことができるようになっていたり、環境になじんだり、集団としてまとまる様子が実現することが、ゆるやかに目指されているのではないだろうか。そうであるならば、この教師（保育者）と子どもが新たに出会い、活動を構成していく場面のなかでのやりとりの変化にこそ、実践者自身は必ずしも強く意識していない、子どもたちの学校的組織への十全な参入を可能にしている「仕掛け」が含まれているはずだ。この仕掛けを解き明かすという意味で、本研究は「社会化」をエスノメソドロジー的に再特定化する試みになっている。

以上が、本稿の問題設定と研究方法を導く学術的背景である。

3 本論文の独自性

本論文の独自性は三点ある。第一に経時的な変化を捉えた映像データを分析対象にしている点、第二に社会化研究をエスノメソドロジー研究として行うプログラムを提示している点、第三に研究知見が臨床性を持つ点、以上の3点である。

第一に、本論文で主に分析対象となるのは、幼稚園入園時から一定期間の保育室内でのすべてのやりとりを記録した映像素材から抽出したデータである。そのため、幼稚園内で日々繰り返されるルーティン活動（第3章）がまとまっていく過程や、列になる練習（第4章）が展開してい

く過程を、日々の映像の比較から捉えていくことが可能となる。こうしたやりとりの経時的な変化の記述を目指した相互行為分析は、従来の社会化研究では行われてこなかった。

第二に、本論文では「社会化」概念のエスノメソドロジ的再特定化に向けて、「社会化」概念を、社会のメンバーによる変化の観察・記述（一階部分）と、その上に専門家によってなされる記述（二階部分）によって構成される「二階の概念」として捉えている。そして、この「社会化」の一階部分を記述対象することを必要な作業として提示している。「社会化」過程の一階部分の記述（「できるようになる」「なじむ」「まとまる」など）は、教師（保育者）と子どものやりとりの日常的なかかわりと、そこでもたらされるなにかしらの変化を、その場にいる人々の志向に基づいてすくい上げていく作業となる。それは「社会化」研究がもつ「新参者の参入」過程を捉える意義を保ったまま、従来の「社会化」概念によって損なわれていた教育場面の日常性と、そこに含まれる詳細かつ合理的な側面を回復させる作業であり、それは同時に、子どもが学校に参入していく過程の重要な特徴を特定していく作業となる。

第三に、上述の方針を採る本論文の分析の記述は、実践者の志向に即することが目指されるため、分析知見の実践への還元可能性がある。本論文では、分析記述の主題を研究者の側が設定するのではなくメンバー自身の問題と解決に照準することを目指す。その結果得られた記述は、実践に差し戻されたとき、実践から乖離した「提言」としてではなく、メンバー自身によって意義が見いだされるものとして受け止められうるものとなる。

4 各章の議論が明らかにしていること

まず序章では、本論文の問題の所在を明確にするために、社会学および教育社会学における社会化研究の展開を確認し研究の立場を設定している。教育社会学における社会化研究は、構造機能主義の枠組みのもと幅広いテーマを対象としてきたが、1980年代の解釈主義的アプローチの受容以降、従来の規範的パラダイムの社会化研究の問題点が浮き彫りとなり、経験的研究に行き詰まりが生じていた。この状況に対して本論文は、従来の社会化研究の関心（組織への新参者の参入）を引き継ぎつつも、社会化の枠組みを取り外す方針、すなわち、「社会化」過程を「二階の概念」として捉え、研究者が社会化という記述を与える以前の、社会の成員が経験する子どもが「なじむ」「まとまる」「できるようになる」過程の記述を行う方針を設定する。序章では、この方針に向けて、従来の「規範の内面化論」の前提となっている行為の「規則への服従」モデルから距離をとり、行為の「規則の利用」モデルに基づいて、実践の規範的秩序を捉えていく道筋を論じている。

第1章では、教育のエスノメソドロジ研究の先行研究を検討することで、エスノメソドロジ研究としての本研究の立場を設定している。子どもに焦点をあてたエスノメソドロジ研究は、子どもを無力な存在としてではなく、相互行為能力を発揮しながらやりとりに参加していく姿を捉えてきた。また、教室場面の研究は、制度的場面として特有な形で組織される教室内のやりとりの詳細を特徴づけてきた。第1章は、こうした議論を整理しながら、幼稚園での相互行為に、園児が相互行為能力をどのように用いて参加していくのか、そして、保育者は園児たちにどのような対応を行っていくのか、この両方を捉えていく作業を基本的な分析課題として設定する必要があることを論じている。

第2章では、調査対象となったフィールドのエスノグラフィックな情報を確認することを通して、本論文の調査が単なるデータ収集ではなく、調査者自身が実践に浸される過程であったこと、そしてそれにより、実践において用いられる固有の方法の妥当性を捉えることが可能となったことを論じている。またこうした本研究の調査分析の特性を踏まえて、エスノメソドロジーの「ハイブリッドスタディーズ」の議論を参照しながら、本研究の臨床的意義を提示している。

以上の準備作業を踏まえて、第3章から第5章では、幼稚園に特徴的な活動に着目して、入園まもない園児と保育者の相互行為の組織がどのようになされているのかが記述される。

第3章では、入園まもない子どもたちを幼稚園に「なじませる」ためのルーティンの活動として、入園後5日間の「おあつまり」場面に着目し、そこで行われている、保育者の合図に合わせて返事をする、という活動が、日を追うにつれてどのように形作られているかを検討している。一連の記述作業から明らかになったのは、毎日同じことが繰り返されているように見えるルーティンの場面が、実際には毎日に現下の課題性を変えており、その課題の変化を園児と保育者の双方の交渉で作り上げていくことを通して、合図に対する「まとまった」返事が達成されているということである。また、入園まもない園児たちは、保育者の指示に対して様々なかたちで「エラー」をするが、その「エラー」はつねに、相互行為上は一定の合理性を持っており、その合理性ゆえに、保育者の想定しない形で園児の振る舞いのまとまりがつくられていくことを知見として論じている。

第4章は、幼稚園での集団的活動の構成に焦点を置き、園児が「列になる」練習場面の教示がどのように構成されているのかを分析している。園児たちは、未知の活動への指示には、すぐには従うことができない。そうした状況に対して、保育者は初めに与えた指示に対する園児の反応を資源として、次なる指示の発話や動作を調整することで、園児が指示に従う状況を達成している。このことが分析から明らかになる。さらに保育者は、一度活動達成される際に用いていた資源を再利用することで、次の活動へのスムーズな以降を構成していた。園児らが達成していく活動の、ある段階から次の段階へ、という段階性は、それが保育者によって予め計画されることによるのみ生み出されているのではなく、常にその場で起きる局所的な活動に内的に結び付けられていることが明らかとなる。こうした記述を経て、園児たちが、個人的な課題として構成されていた列づくりに取り組むことを通して列全体の組織への志向を見せる詳細な過程が論じられる。

第5章では、「製作」活動における一斉指導場面に着目し、その一斉指導がいかなる形で個人指導に向けられた構成になっているのかを検討している。製作場面においては、「作業手順」と「道具の使用法」を合わせて指示すること、また、個々の園児の知識・能力のばらつきを処理することが、実践上の課題として想定されたが、保育者たちの教示は、このふたつの課題の両方ともを非常に合理的な形で処理し、かつ一斉指導後の個人作業にも活かすことができる形で組み立てられていた。製作活動における道具の使用法の指示は、いま関わっている製作の実際の手順に埋め込まれることで、その後の個人作業で起こりうる問題である「間違っただけか」と「正しいやり方」が特定可能にし、さらに、その知識提示の構成はその場の資源を用いて答えることができるように構成されることで、個々の園児の知識・能力のばらつきを吸収する組み立てになっていた。さらに、その知識提示のやりとりはIRE連鎖として構成されることで、その知識を園児集団にとっての公的な知識、つまりそれ以降規範的に用いることができる知識となるよう

に取り扱われていた。

第6章は、「学校的社会化過程」を通じた「児童」のありようを検討する作業として、小学校6年生の教室で起こった「お説教」場面が分析される。幼稚園年少児と比較すると、小学6年生は学校的な振る舞いの規則を十分身につけた存在として捉えられる。しかし、その児童としての姿は決して一枚岩なものではない。児童たちは、「お説教」を受けるにあたり、教師の発話に対する反応を学級全体で協働産出しながら、その活動の展開に即しながら、「お説教を従順にうける児童」としての姿、「教師と親密な児童」としての姿を観察可能にしていた。こうした観察から、児童としての振る舞いの規則は、決して自動機械的に作動するものではなく、その都度のローカルな活動のなかに埋め込まれる形で作動するものであり、それぞれの活動において、「児童」というカテゴリーが常に複層性を帯びたものとして提示されることが示唆されている。

終章では、本論文の知見を踏まえ、「初期学校的社会化過程」において園児たちが学校的な振る舞いを身につけていくプロセスについて概括している。幼稚園での振る舞いを身につけるということは、そこで用いられている活動の方法を知ることである。しかしそれは、直接「規範の伝達」として提示されるようなものではなく、園児は自らの相互行為能力を発揮することで、保育者の働きかけに対する何らかの反応を常に産出していく。保育者はその反応に即して活動の再デザインを行い、園児たちとの活動を成り立たせていく。入園まもない時期の保育者と園児の活動の構成から見えてくるのは、このような、さしあたり活動を成り立たせるための保育者と園児の相互交渉過程である。幼稚園での日々の活動は、その都度の課題性の再デザインを重ねていく。その再デザインは、それまでの活動で共有した資源を用いて、何をすべきかを可視化しながら、新たな活動の要素が積み重ねられる形で行われていく。こうした活動の微細な再構成を積み重ねることで、園児たちが幼稚園での活動に「なじんでいく」ことや、「段々とできるようになっていく」事態が生み出されているのである。以上のような、園児が「なじんでいく」過程、「段々とできるようになっていく」過程は、極めて社会的現象であるにも関わらず、これまでの社会化研究ではほとんど見えてこなかった実践の相である。本論文の記述は、このような規範の伝達や規則の提示といった従来の社会化論の枠組みではむしろ捉えられない子どもと大人の相互交渉が浮かび上がることで、幼稚園の活動の構成における極めて社会的な過程の一旦を明らかにしている。以上のことを総括的に論じている。